

ユニセフチャリティー弓道大会という試み

学校法人北陸学園 北陸高等学校

中 村 浩 人

1 はじめに

北陸高等学校・北陸中学校弓道部およびそのOB会は、2001年（平成13年）から毎年5月のゴールデンウィークに『ユニセフチャリティー弓道大会』を主催している。誰でも出られる、誰とでも出られる弓道大会として、県内はもとより、県外からも、小学生から還暦を過ぎたねりんピック選手まで、幅広い年齢層の選手にご参加いただいている。一人200円の参加料をユニセフ協力金としていただき、当日のカンパも含めた募金総額から大会経費を差し引いた残額を（公財）日本ユニセフ協会に寄付している。

第1回大会は参加選手137名、募金総額67,330円だったが、昨年の第14回大会は参加選手360名、募金総額186,000円と大きく成長し今日に至っている（図1）。成長したのは大会規模だけではない。この大会を運営することを通して、部活動として一回りも二回りも成長できたことを実感しているし、大会役員として走り回った生徒たちがその視野を広げて進路を決定し、やがて子供を連れて帰ってきてくれるという流れもできつつある。

この大会を主催してきた実践を「部活動の活性化」の事例として紹介する。

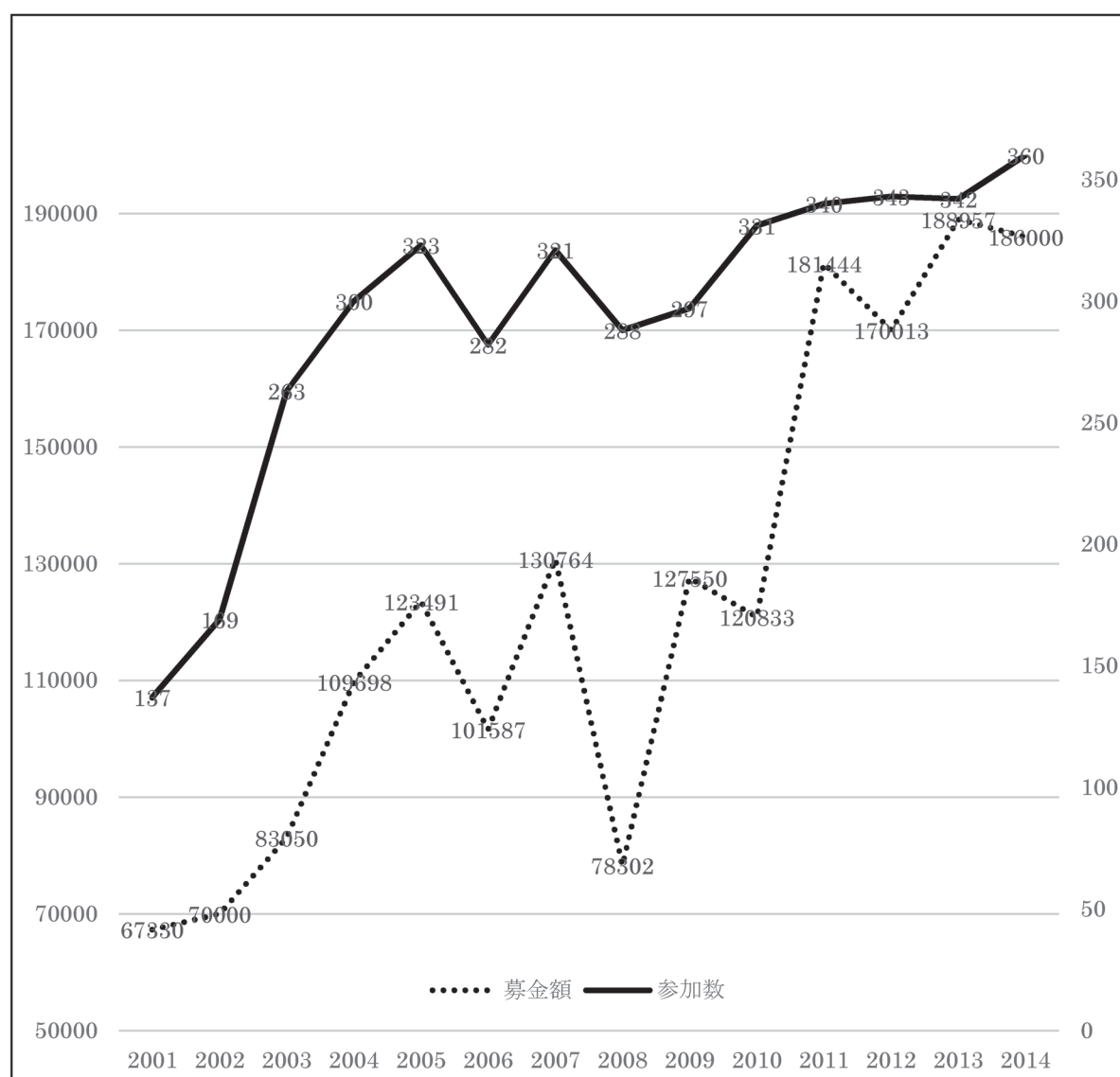


図1. ユニセフチャリティー弓道大会の参加選手数と募金総額の年次推移

(1) 学校環境

本学園は親鸞聖人のみ教えを建学の精神とする浄土真宗本願寺派立の学校として1880年（明治13年）に開校した。校地は福井市の中心市街地に位置し、近くには福井大学をはじめ多くの学校がある。普通科、商業科の2科を有し、全校生徒は1800人弱と県下最大規模を誇る。全国でも強豪で知られる男子バスケットボール部、男子ハンドボール部を筆頭に多くの運動部、文化部が活躍している。1998年（平成10年）には北陸中学校を開校し、中高一貫教育に取り組んでいる。

(2) 弓道部の歴史と現況

1963年（昭和38年）、福井インターハイの前年に創部。長らく福井市弓道場で活動してきたが、1993年（平成5年）に念願の校内弓道場が完成。その後増築を重ね、現在は9人立ちの射場で中高合わせ100人を超える部員が教員2人の指導の下活動している（図2）。部活動のモットーは「明弓・自助・感謝」。

〈主な戦績〉

インターハイ出場：男子団体12回、女子団体3回、男子個人14人、女子個人13人

最高成績：男子団体5位（平成14年）、男子個人3位（平成12年）

全国選抜大会出場：男子団体7回、女子団体7回、男子個人10人、女子個人6人

最高成績：女子団体3位（平成19年）、男子個人8位（平成24年）

2 研究の目的

全国的な少子化の進行は福井県も例外ではない。福井県高体連弓道専門部の加盟校数（男子16校、女子17校）は変わっていないが、生徒減の影響で工業高校では女子部が、商業高校では男子部が活動休止状態となる傾向がある。県全体の部員数は2006年（平成18年）までは増加傾向にあったが、2006年の793名をピークに翌年一転して減少し、現在は620～650名程度で推移している（図2）。

顧問の悩みは部員確保だけではない。「高校時代にあれだけ熱心だった部員が、卒業すると弓の世界から遠ざかってしまう。」一般の競技団体の方と話しをしても、よく交わされる話題である。そもそも弓道では、高校、大学、一般という枠組みで試合が設定されているものが多く、これらの枠組みを超えて交流できる試合が少ない。そのため、多くの高校生は一般の選手の顔も知らず、卒業後どうやって競技を継続したらいいのか、その糸口すら知らないことが多い。

高校の部活動を活性化させ、卒業後も競技につながるきっかけをつくり、弓道界全体を盛り上げる、そんな夢を実現させる目的で始まったのが「ユニセフチャリティー弓道大会」である。

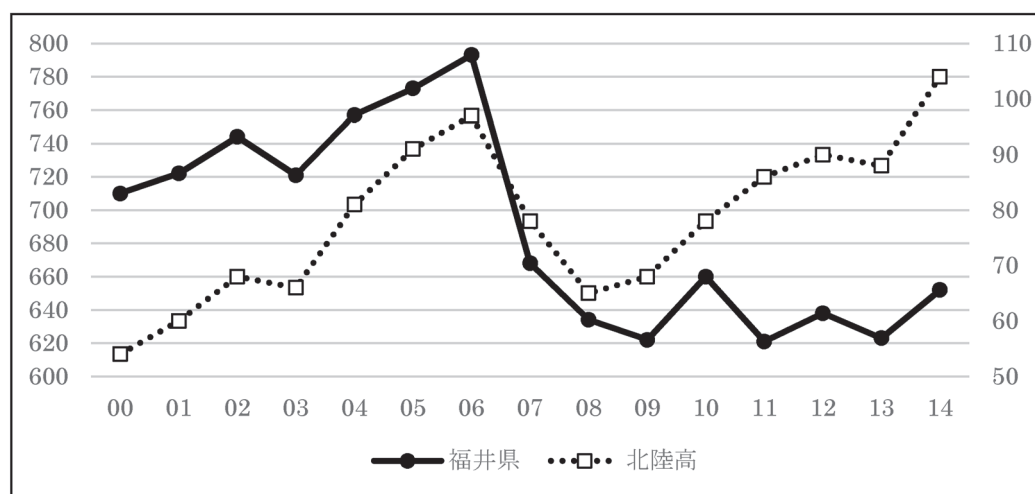


図2. 福井県全体と北陸高等学校の弓道部員数推移

3 ユニセフチャリティー弓道大会とは

(1) きっかけ

2000年（平成12年）のある日のこと、一般で活躍する選手も含めた弓仲間が集まった時、本校弓道部顧問である谷口広治が1枚の企画書を取り出した。「マラソンやその他のスポーツでは、チャリティーを目的とした大会が開かれているが弓道では聞いたことがない。うちの部員を使ってチャリティー弓道大会をやりたい。」話し合っているうちに、次々とアイデアが出てきた。生徒にボランティア体験をさせる、卒業生に現在の所属とは無関係に昔の仲間と一緒に弓を引ける場を与える、国体で優勝した代表選手を特別ゲストに迎える、一般の選手にも参加してもらい、卒業後の活動の場所が町にあることを知ってもらう、同じ弓引きが中高大一般の垣根を越えてみんなで仲良くなる、平和で楽しく弓が引ける我々が戦火に苦しむ世界の子どもたちに手を差し伸べる……。今に至るこの大会の意義が次第に立ち上がってきた。

(2) 日本初のチャリティー弓道大会開催

第1回大会は2001年（平成13年）4月30日、本校弓道場で「北陸オープン段別チャリティー弓道大会」という名称で行った。国体優勝、全日本教職員選手権大会優勝という選手にもご参加いただき、初めての試みにもかかわらず、高校・大学・一般から137名の選手が集まって下さった。「練習試合を行う程度の感覚で」と考えたことがハードルを下げ、大会の実現につながったと思う。学校施設を利用し、役員も選手も手弁当で手伝ってくれたことから大会経費はほぼ0に抑えることができた。

第2回大会からは会場を公共施設に移した。スタッフに本校関係者以外からも加わるようになったので、主催者を「弓と地球を愛する仲間たち」という名称に変え、大会名も（公財）日本ユニセフ協会の許可を得て「ユニセフチャリティー弓道大会」に変更した。第3回大会からは、（公財）日本ユニセフ協会の全面協力により、会場にユニセフ公式バナーが掲げられ、世界の子どもたちの現状を伝えるユニセフのポスターが所狭しと貼られた。日頃は自分のことばかりに気をとられがちな選手も、この日ばかりは世界の子どもたちに思いをはせながら弓を執る。我が国もかつて悲惨な戦争を体験し、辛苦を耐え忍んだ時代があった。開会式では世界の子どもたちに貢献するという大会の意義を説き、選手の皆さんに協力をお願いしている。

(3) 本大会の効用

① 「誰でも出られる」「誰とでも出られる」

弓道は競技者の年齢や技量に関係なく、誰でも一緒に競技することができる。第13回大会では石川県の中学生在が並み居る名選手を差し置いて女子個人の部で見事優勝を果たした。大学や一般で活躍している選手たちに堂々と勝負を挑めるこの大会に中高生は目を輝かしている。勝っても負けても、勝負が終われば記念写真と一緒に収まる。本大会は「誰でも出られる」「誰とでも出られる」ということを謳い、インターネットを通じて県内外から年齢所属を問わずにあらゆる階層からの参加を呼びかけている。

団体戦は3人が1チームを構成し、一人4射ずつ3人で12射を放ち、その的中数で勝負を競う。

本大会では現在の所属にこだわらずにチーム編成ができるので、その構成は多彩である。親子で構成されたファミリーチーム、卒業してバラバラになったかつての仲間が集まった同窓会チーム、「高校生、OB、顧問」というチーム、ライバル校のエースが一同に集まったドリームチームなど様々である。

② ホームカミング

第1回大会から卒業生に積極的に声をかけ、この大会をホームカミングの場にしようとしてきた。この大会をきっかけに北陸高校弓道部OB会が正式に発足し、チャリティー大会の運営、現役部員の平素の活動のサポート、OBの競技復帰サポートなどをしてもらっている。しばらく競技から離れて

いても、この大会に出ることを目標に練習を再開してもらえればと思っている。

選手や役員でなくても、大会当日に挨拶に来る卒業生も多い。一旦競技から離れると、選手として出場するのはハードルが高いかも知れないが、「募金だけでも」という言い訳で顔を出してくれる。15年も続けていると、かつて大会を運営した部員がやがて結婚して子供ができましたと家族連れで来てくれるようになった。卒業生の元気な姿を見るのは教員冥利に尽きるし、現役の高校生にとっては将来の自分の姿を思い描く貴重な場であると思う。他校の卒業生も仲間同士参加して旧交を温めている。

③ ボランティア活動

本大会は中高の現役部員とOB会のボランティアが運営している。『今時の若者』と呼ばれる彼らだが、大会運営を通じて「平和の大切さ」「世界の子どもの現状」「自分が置かれている立場」を感じることができる。入部して1ヶ月に満たず試合に出場できない一年生部員たちは、矢取りという裏方仕事を一日中担当する。上級生が常に横にいて、彼らをサポートする。仕事の指示もさることながら、いかに彼らを飽きさせず集中させて仕事をさせるかが上級生の腕の見せ所である。時には冗談を言って笑わせ、時には仕事ぶりを褒め、タイミングを見計らって休憩をさせる。上級生には、受付、招集、進行、的前審判、記録（パソコンによる的中の集計）など大会運営の要所の仕事は必ずあたる。日頃の部活動や練習試合など年間を通してできるだけ大会運営の練習をさせ、チャリティー大会を成功させるのに、どのような動きが必要かを生徒自身に考えさせるようにしている。どんな時も笑顔を忘れず、おもてなしの心でゲストである選手の皆さんをお迎えする。気持ちよく弓を引いてもらい、実力を十分に発揮した高い的中で競い合う。大会役員として部員たちは、それぞれの持ち場で「何が自分の役割なのか」「自分は何をなすべきべきか」を考え実践する。3年間それぞれの立場で大会運営に携わることは高校生活の中でも貴重な体験となる。進学や就職の際の自己PRで、この体験を熱く語る部員が少なくない。

④ 他県への広がり

本大会の取り組みは、第1回から大会公式ホームページを開設し、インターネットを通じて広く公開してきた。おかげさまで多くの方からお声掛けをいただき、遠方からもご参加いただくなど、活動が県を超えて広がった。2005年には長崎県・海星高校弓道部が、2011年には長野県・塩尻志学館高校弓道部がそれぞれ我々の活動に共鳴して下さり、それぞれの場所でチャリティー大会を開いている。

4 他校教員および一般選手に対する意識調査の結果と考察

本大会について、県内教員および一般で活躍する選手がどのような意識をもっているかを調べる目的でそれぞれアンケート調査を行った。アンケートは2015年（平成27年）8月に開かれた県民スポーツ祭に参加した教員および一般選手を対象に行った。質問項目と結果は以下の通りである（図3、4）。

[教員用]

質問1. 貴校はこれまでにユニセフチャリティー弓道大会に参加されたことはありますか（所属部員が個人として参加したものも含む）。あてはまるものに○をつけて下さい。

1. ない 2. 1～2回出場あり 3. 3～数回出場あり 4. ほぼ毎年出場している
5. わからない

質問2. 来年以降の大会に出場を検討されるおつもりはありますか。あてはまるものに○をつけて下さい。

1. 出場するつもりはない 2. 検討してもよいが難しいと思う

た3年生は参加できない。3学年が揃って参加することにこだわると5月以外に開催することは難しい。

5 謝辞

練習試合の中で募金を募るという程度の感覚で始めた大会が、回を重ねるごとに大きく成長したことは主催者の一人として望外の喜びである。これまで大会に参加して下さった県内外の選手の皆さん、ご理解とご支援をいただいた福井県高体連弓道専門部の先生方、遠方から生徒をご引率下さった県外の先生方、そして大会を支えたすべての本校部員に心からの感謝を申し上げる。

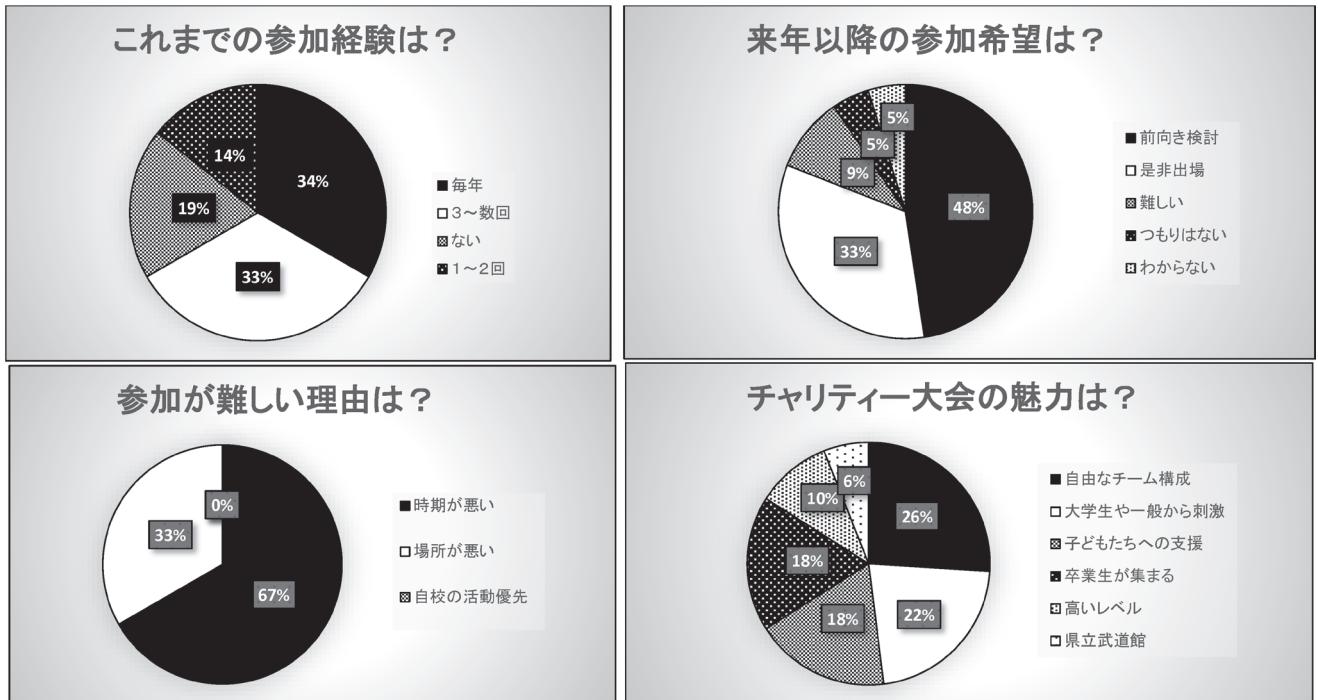


図 3. 福井県内弓道部顧問のチャリティー大会に対する意識

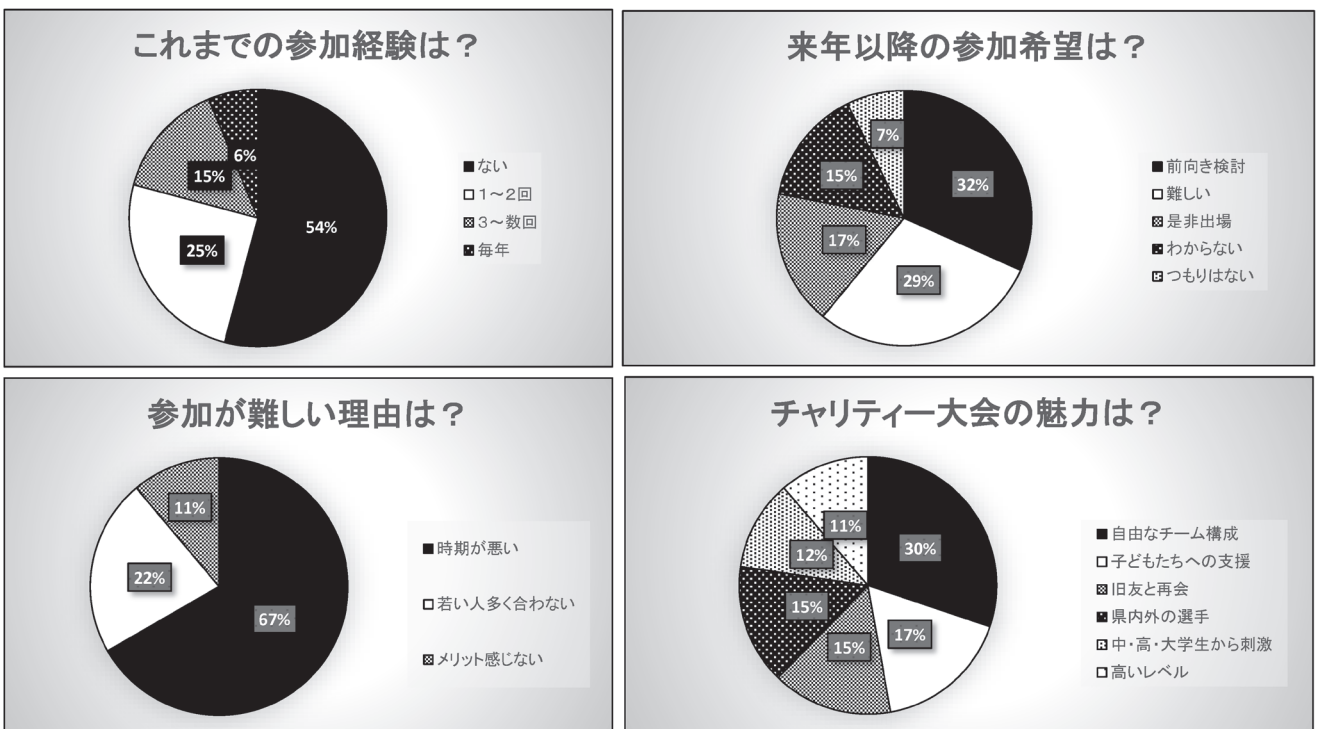


図 4. 福井県内一般選手のチャリティー大会に対する意識